Ｎｏ．４６７【２０２１年８月６配信】
「女性と戦争・平和―銃後の暮らし」展示図書のご紹介（担当：鈴木）

こんにちは！　歴史資料室の鈴木です。

現在、歴史資料室では「女性と戦争・平和―銃後の暮らし」の館内展示を行っています。今回は、その展示図書の中から 2 冊をご紹介したいと思います。

図書展示のようす

まず、若桑みどり著『戦争がつくる女性像　第二次世界大戦下の日本女性動員の視覚的プロパガンダ』（筑摩書房 1995 年）です。

世界に絶えることのない「戦争」。そこには男性中心の記録や研究が多く、女性はその犠牲者として描かれることが多いように思います。第二次世界大戦下の日本女性に関しても、やはりその悲しみや苦しみを記したものが多いのではないでしょうか。

しかし、非戦闘員である女性たちもまた、違ったかたちで戦争に協力していました。

女性たちは、大日本婦人会や処女会といった組織に組み込まれ、戦時体制のもと「銃後を護る」女性となることが求められました。それは、たくさんの子どもを産むことで次世代の兵士や生産者を育て、家を守って夫や息子を後顧の憂いなく戦場に送り出し、男性の代りに増産に励み、また白衣の天使として兵士の救護を行うなど、「母性」と「強さ」を兼ね備えた女性像です。そして、軍部はこうした女性像を社会に浸透させるため、報道、ポスター、雑誌などを通してプロパガンダを行ないました。

本書では、美術史家である著者が、昭和 10 年代の婦人雑誌に描かれた表紙や挿絵を読み解くことで女性の戦争役割を探ります。

もう 1 冊は、飯田未希著『非国民な女たち　戦時下のパーマとモンペ』（中央公論社　2020 年）です。

「贅沢は敵だ」「パーマネントはやめませう」などと叫ばれた戦時下でも、活動的で手入れのしやすい洋髪や洋服に慣れていた女性たちは、髪を整え颯爽と洋服を着こなしていました。そして驚くことに、パーマ（電髪）の施術ができる美容院は、都市部に限らず農村部でも行列ができるほど繁盛していたのです。さらに電力事情が悪化すると、客が持ち寄った配給の木炭でコテを熱する「木炭パーマ」も生まれました。

ちなみに、昭和 18 年（1943）6 月の『東奥日報』には、「電髪の美はセットの技術から 白菊美容院」「電髪は技術本位のタテヤマ」「電髪は山添（夜間営業開始）」といった青森市内の美容院の広告が出ていますので、やはりパーマをかける人が多かったと思われます。

また、男子の国民服に次いで考案された婦人標準服や、モンペ着用の推奨にも賛否両論があり、女性たちの評価も芳しくはありませんでした。

本書では、個人の自由が制限された総動員体制の中でも、そうした美意識にこだわった人々とその背景に迫ります。

ほかにも、以前にご紹介した斎藤美奈子著『戦下のレシピ　太平洋戦争下の食を知る』（岩波書店　2002 年）など戦時下の暮らしに関する本、現代の紛争地における女性に関する本などを 8 階に展示しています。この館内展示は 8 月 24 日（火）までとなっておりますので、ご来館の際にはぜひお立ち寄りいただければと思います。

斎藤美奈子 著
『戦下のレシピ』